分科会報告

B「総合的学習」から考えるキャリア形成

佐　藤　俊　樹

1. 総合人間科の基本的精神

名古屋大学教育学部附属中・高等学校が総合人間科に着手したのは1995（平成７）年までさかのぼる。設置当初は、学習の遅れがちな生徒に学びの意義を自覚させ、学習意欲を高めていくことをねらいとして２つの重要課題を掲げた。

①生徒一人ひとりの目的意識への働きかけ、自己発見・自己拡大につながる学習体験などを通して、自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる
②人類が直面している課題を念頭に置き、学習における共同化、社会と結びつき地域に出て行く学習、生徒の自主的活動への発展を視野に入れた学校文化･学校行事重視等、学習の質の転換を図りながら、教員全員の参加によって総合的に展開する。

そして、総合人間科がめざす生徒像として以下の２つを掲げた。

①現代の課題を、様々な体験を通して自らの問題とし、主体的に学びながら、表現し、友人と共に学び合うことができる生徒像。
②自分の人生を社会と重ね合わせて考え、未来に向けて自覚的に行動していく生徒像。

さらに、総合人間科の強い性格として「**３つの脱**」を打ち出した。すなわち、

①脱教科･････21世紀に向けての現代の課題を学ぶ。
②脱教室･････地域社会に出かける学習。つまりフィールドワークを行う。
③脱偏差値････知的関心の形成、問題解決能力、コミュニケーション、表現する力、実践力など、多元的総合的に生徒をみていく教科。

である。

それ以来、10年以上にわたる実践を積み重ね、新しく「ソーシャルライフ」「選択プロジェクト」「新教科群」がカリキュラムに登場してきても、総合人間科が本校の教育の基軸をなす授業であるとの認識を教員・生徒ともに有している。『**総合人間科は学校と社会を結ぶ“橋”である**（2003年度　中２）』ということばが、総合人間科の特徴をよく表している。

2. 各学年の総合人間科テーマと特色

総合人間科には各学年ごとに大テーマが設定されている。そして、それらのテーマは生徒の興味関心をどのように高めていくことができるのかということを念頭に置き、発達段階に即した内容と系統性を考えて設定されている。以下が、設置以来現在まで大きな変化のない、学年ごとの総合人間科の特色である。

学年	大テーマ	内容・目標
中１	**生き方を探るⅠ**	中等教育の入り口として「生き方」の入門とする。身近な人々との出会いの機会を多くもち、生徒の興味関心を大いに広めていく。その中から学習目標をつかみ、中学校生活のスタートを切ることを目標とする。
中２	**生命と環境Ⅰ**	「生命・環境」教育への知的関心を形成する。たとえば、自分の食生活を記録調査する中から、疑問・課題を発見していく学習などを取り入れることにより、自分の問題として生徒が自ら学ぶ意欲を育てる。
中３	**平和を学ぶⅠ**	中学のまとめの時期としてテーマをグローバルに発展させる。研究旅行の目的地でもある「広島」をフィールドワークの場とし、国際理解・平和の問題に取り組み、生徒の問題関心の自覚化を促す。その前段階にあたる導入期に、留学生との交流、海外体験の聞き取り、祖父母の戦争体験、戦時中の暮らしなど、身近な生活体験から出発する。

高１	**生命と環境Ⅱ**	大テーマは中２と同じであるが、高校生の学びへの関心は実に多岐にわたり、個人差も大きいことを配慮する。高校教育への導入としての性格と自分の興味関心と進路とのつながりを探るという両面から、このテーマは実に幅広く、生徒一人ひとりの問題関心に対応することが望まれる。
高２	**平和を学ぶⅡ**	高１の学習体験の発展として、歴史的・文化的視点と現代的課題との関連性を重視する。沖縄をフィールドワークの場として、民族・民俗・風土・大和民族との関係など「国際理解」「平和」「人権」を総合化していき、現代の課題に迫ることが必要である。
高３	**生き方を探るⅡ**	中等教育の出口にあたる。社会的自立に向けて、自分を振り返りながら自己実現の目標を探る。生徒相互で自分の生き方を出し合いながら、他者への理解と共生のあり方を学ぶ。中高６年間で体験し、学んだことに対する自己評価として、自らの将来展望、人生選択を考える。

3. 総合人間科の評価（１）

総合人間科が始まって間もない時期（1997，1998年）に、生徒へのアンケートにより、総合人間科がどのように役立つかを探る調査があった。生徒の主観が強く働いているとはいえ、総合人間科に携わる教員として現在もなお実感できる部分が多い。アンケートの結果、評定値が高かったのは以下の項目である。

- **自分の考えをまとめていく力をつけるのに役立つ**
- **物事を自分で決定していく力の育成に役立つ**
- **疑問点を自分で調べる力をつけるのに役立つ**
- **他者との協力の仕方を身につけるのに役立つ**
- **他者への思いやりを育てるのに役立つ**
- **将来の生き方を考えるのに役立つ**
- **生活の知恵を形成するのに役立つ**
- **人前で話す力を育成するのに役立つ**
- **上手に文章表現をする力をつけるのに役立つ**

これらの項目は総合人間科の有益性の中核をなすものとし、「自己学習能力開発因子」と命名された。これはまさに当時教育課程審議会が答申の中で言った、「総合的な学習の時間のねらいは、自ら課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることである。また、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付けること、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成すること、自分の生き方についての自覚を深めることも大きなねらいの一つとしてあげられよう。」に内容的にもほぼ一致するものであった。

4. 総合人間科の評価（２）

2005年11月、本校のすべての学年を対象にして学力がどのようについたかを探る調査を行った。この結果は、現在同時進行中であるＤ分科会「併設型中高一貫カリキュラム評価と学力」で報告されている。このうち、本分科会では総合人間科に関わる部分を紹介して、生徒の実感として「力がついた」と感じる度合いで評価をしてみる。

なお、調査結果を次ページに示すが、表中の①～⑧は本校のめざす８つの力を指している。その内訳は以下のとおりである。質問は５検法（１まったくあてはまらない、２あまりあてはまらない、３どちらともいえない、４ややあてはまる、５よくあてはまる）で質問をしたので、平均値がおおむね3.25以上の数値がないと、全体として「力がついた」とは言えず、4.00以上の数値になると、はっきりと「力がついた」と感じているとしてよいと考える。

- **学び合う力**
  - **①理解　②思考　③表現**
- **問題を発見し探求し解決する力**
  - **④課題設定　⑥創意　⑦探求**
- **行動する力**
  - **⑤自分を知る　⑧人や社会と関わる力**

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
総合人間科	中1	3.94		**4.07**		3.76			**4.23**	3.90
	中2	3.72		3.66		3.46	3.60	3.08	3.55	3.58
	中3	**4.44**				**4.07**				**4.08**
	高1	3.69		3.78		**4.08**		3.69	**4.04**	**4.16**
	高2	3.92		3.55			3.62	3.21		3.95
	高3	**4.00**		3.60		3.78	3.58		3.75	3.56

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
教科	中1社会（地理）	3.19				3.66			*2.91*	
	中2英語	3.11		*2.60*					3.54	3.01
	中3数学	3.38		3.42				3.61	3.09	3.91
	高1国語（古典）	3.08		*2.68*					*2.56*	
	高1理科	3.42		*2.81*		3.37	3.35	*2.94*	3.13	

既存教科の授業の平均値は、総合人間科のような研究開発関連の授業に対して低くなっており、一部には生徒がねらった力を「ついていない」と感じるような数値もみられる。これは、生徒がそれぞれの教科のテストを受けており、教師による評価を毎回受けていることから、自分の評価を意識して低めにつけたとも考えられるが、総合人間科、新教科、学びの杜等の教育課程や授業手法の何を、どのように既存教科に取り入れていくかを検証し実践する必要があるということも同時に物語っていると考えられる。

総合人間科に関していうならば、各学年において一部を除いて8つの力のいずれにも高い値を示しており、生徒から高評価を得ていることが伺える。この調査から、学力構造のとらえ方として総合人間科の果たす役割が大きいということを再認識した。

5. 総合人間科の問題点

総合人間科には、教科の枠を取り払い、生徒の興味・関心を掘り起こすところから学び始めるため、学ぶ楽しさを改めて感じ、何のために学ぶのか、学びの先に何があるのかを考える機会となるというような大きなメリットもある。しかし一方で、長年にわたる蓄積を振り返ると、次のような問題も明らかになってきた。

①好きなことがある場合は取り組むきっかけをつかみやすいが、何事にも無関心な生徒では追究活動が進まない。
②生徒にとっても教員にとっても、それぞれが意義づけをしなければ意味が薄いきちんとした意義づけをしないと作業だけを行うことになり、マンネリ化する
③当該学年の生徒と教員の力量にかかっている部分が大きいため、取り組みの広さや深さの格差が大きい。
④考えるためには知識がいるため、総合人間科が動機づけとなって各教科での取り組みが向上する生徒もいる。しかし、各教科との相互のフィードバックができない生徒もいる。
⑤個人テーマは、自分のテーマについては自分が最も詳しいという自信につながる。自分が追究しなければ進まないため、学びの主体が自分にあることがわかる。一方で、まわりに手助けを求めることができない生徒は進まない。

総合人間科が始まって11年目が終わろうとしている。創立当初と比較して、生徒を取り巻く環境も生徒の特性も変化してきた。今一度これらの問題点を検討してみる価値はありそうである。

6. 総合人間科への「キャリア」の付与

2000（平成12）年度から、文部科学省（当時は文部省）研究開発に、総合人間科をより一層発展させる形で取り組むようになった。タイトルは「『高大の連携』を生かした『青年期のキャリア形成』 －総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発－」である。この研究開発への取り組みにより、総合人間科には「キャリア」という性格が付与され、新しい段階にはいることとなった。

現在では「キャリア」ということばは世の中に広く浸透してきているが、研究開発開始当初は、教員の間でもその意味を理解するところから始まるほどかなり遅れた状態であった。キャリアの意味は単純な「進路」とか「職業選択」にとどまらず、**「自分の人生をデザインする」**という、かなり広い解釈をするようにした。また、過去から現在に至る「形成してきたキャリア」に加えて、現在から未来にかけての「形成していくキャリア」があるということも理解した。さらに、研究開発では「キャリア形成」を将来に向けての自己実現をめざす力の育成としてとらえ、総合人間科にその役割を果たす場を期待した。それまでの実践の蓄積もあり、特に大きなトラブルもなくスムーズに実践を行うことができ、また、生徒も総合人間科によって主体的に「自分の人生をデザイン」して進路選択を行うことができるようになっていった。一例として2001（平成13）年度研究協議会で行った座談会で述べた高３生のことばをあげる。

「中１から飛行機に興味を持ち、中２で飛行機を総合人間科のテーマにした。高３の６月のフィールドワークで名大工学部を訪問し、興味の中心は飛行機からロボットへ移った。機械航空工学科に合格したが、航空ではなく機械の方へ進むことを考えている。」

彼は現在では１年飛び級で大学院に合格し、ロボットの研究を行っている。

7. 高３から中１が生き方を学ぶ

本日午前の公開授業で、高３からの話により中１がこれからの生き方を学ぶ姿を参観して頂いた。この取り組みは昨年度初めて試みたものである。そのときの中１生が書き残した感想から、中高６か年のキャリア形成にとっての総合人間科の役割について考察してみる。

まずは、１年の最後に高３から話を聞いたことが、**興味・関心を掘り起こすことの大切さ**に気づく機会となった生徒である。

「初めて“関心”をもつことの大切さを教えてもらったのは、『興味・関心のある人へのインタビュー』でお母さんたちに話してもらったとき。でも、その時の私は話を聞くだけで（一応質問したけど）関心の大切さに気づいていませんでした。“なぜ関心をもつことが大切なんだろう？”と疑問に思ってばかりでした。一年間の終わりに高３のＨ先輩の人生（！？）の話を聞いたとき・・・初めて関心をもつ大切さがわかりました。Ｈ先輩がエジプトに興味をもち、それを自分自身で調べること・・・それが名大附の総合人間科のやることなんだと改めて思いました。」

次に、１年の最後に高３の話を聞いてやっと、前ページの問題点の②で指摘した、**自分にとっての総合人間科の意義づけ**を行うことができた生徒の例である。

「それまで私は、『なぜこの授業をやるのか？この授業を受けて何になるのか？』そんな疑問をもちながら中途半端に総合人間科の授業を受けてきました。けれどＹ先輩にこの授業の何たるかを教えてもらい、総合人間科を真剣に受ける気がわいてきました。事実、Ｙ先輩は総合人間科をまじめに受け、医療関係のことを調べてきて、自分の夢、臨床検査技師になるという夢に大きく一歩踏み出したのです。本当にすごいと思いました。あんなに頑張れることを私も見つけたいと思いました。Ｙ先輩には本当に感謝しています。総合人間科はたいへんな授業でした。でも、とてもすばらしい授業でした。本当に皆様に感謝！感謝！感謝！です。」

この生徒は「真剣に受ける気がわいてきた」と前向きな姿勢を見せていることがすばらしいが、それ以上に、人から学んだことで感謝の姿勢をもてるようになっているところがすごい。自分のために人が何かをしてくれたことに対して感謝をすることで、いずれ自分も人や社会に対して恩返しをしようという発想をもてるようになる可能性があるからである。

また、中１段階でも十分にキャリアを意識して総合人間科に取り組めていることを示している感想もあった。

「総合人間科をやっていて一番変わったのは、自分の夢や進路について本気で考えたことです。前までは、夢とか進路は高３の時に決めればいいやと思っていたんですが、総合人間科をやっていて、自分で自由なテーマを調べ、学校を離れて知らない人にインタビューしたり、それらをまとめたりすることで、夢とか進路とか考えて悩むこともありました。だけど、高３の話を聞いたら不安がなくなりました。その先輩は中１のころからうっすらと夢や進路が決まっていたのですが、先輩は**『総合人間科が自分の夢や進路の道しるべになって、夢に近づかせてくれる』**みたいなことを言っていました。やっぱり、５歳上の先輩に言われると不安とかは消し飛んでしまいました。僕は先輩が言っていたように、総合人間科をやりながら夢や進路を決めていこうと思います。」

単に眼前の個人テーマ研究をすることでも様々な力が身につくことを前で述べたが、「夢や進路」ということばを使って総合人間科に向き合ったこの生徒のように、キャリアを意識して総合人間科に取り組むことができるよう、私たち教員も手助けしていくことが必要であろう。

8. 総合人間科での個人テーマの一貫性と進路選択

総合人間科の蓄積が10年に至った昨年度、本校では高1時の総合人間科個人テーマと高3時の個人テーマの一貫性と進路選択をさぐる調査を行った。この中で以下のことが明らかになった。

①高1から一貫した追究テーマをもった者は、テーマ一貫性が低い者より最終的な進路への満足度が高い傾向にある。
②成績の上位・下位に関係なく適切な進路を選択し、概ね満足のゆく進路決定をしている。

「総合的な学習の時間」を本校の総合人間科のように、個人的関心のあるテーマで自分の研究ができる条件を整えれば、**高校1年生から一貫したテーマで研究に取り組むことで、進路決定に満足感をもって卒業する可能性が高い**ことが示唆された。このことは高校段階におけるキャリア教育の一つのモデルケースとなるのではないか。さらに、これを発展させて、**高校1年時から3年間を見越した一貫性のあるテーマ選びの指導**を行うことができれば、より有効なキャリア教育ができるかもしれない。

9. 卒業生は中・高時の総合人間科をどうみているか

総合人間科を中学・高校で経験した卒業生が現在、附属在学当時の総合人間科をどうみているかを探るため、2005年11月にアンケート調査を行った。対象は4年前および5年前の卒業生で、212名に郵送したうち22. 6%にあたる48名から回答を得た。それにより次のような結果が得られた。

Ⅰ「高校在学時の総合人間科に対するあなたの意識は、次のどれに最も近かったですか。」

①大好き	8名（17.4%）
②まあまあ好き	29名（63.0%）
③あまり好きでない	9名（19.6%）
④嫌い	0名（ 0.0%）

Ⅱ「高校卒業時の進路選択に総合人間科は役立ちましたか。」

①かなり役立った	11名（23.9%）
②まあまあ役立った	25名（54.3%）
③あまり役立たなかった	10名（21.8%）
④全然役立たなかった	0名（ 0.0%）

Ⅲ「現在のあなた自身に、名大附属での総合人間科の経験は生きていますか。」

①かなり生きている	15名（31.9%）
②まあまあ生きている	29名（61.7%）
③あまり生きていない	3名（ 6.4%）
④全然生きていない	0名（ 0.0%）

回答数が少ないため信頼度が高い調査ではないかもしれないが、**高校を卒業した後になって、自ら学び考えることを繰り返した総合人間科の経験が生きているとする傾向が読み取れる。**このことは、以下の自由筆記の記述に顕著に表れている。

（問） 上記のⅡの質問で①または②を答えた方へ、どのように役立ちましたか。

（2000年度卒業生）

- 考える時間を与えてくれた。
- 大学訪問を通じて大学を知ることができた。先生とともに授業を一から作る中で、先生自身の歩んでいる進路に注目することができ、そこから得るものがあった。
- **入試の小論文**で、総合人間科での体験があったことにより、内容の濃い文章が書けました。
- まず、実際に**現場を見てそこの人に話を聞けた**ことで、自分たちの調査だけではわからない苦労や、その職に就く際に求められることがわかった点。
- そのころに興味をもっていたバイオ分野に関して学ぶことができて、農学部の方へ進路を固めることができました。落ちましたが。
- 高校3年生の時に自分の関心がある分野の大学の学科を訪れ、**自分が大学で何を学びたいかがより明確になった。**
- 経済学部に進学しようとしていたため、経済学部でどのようなことを学ぶのかを知ることができ、また、その内容が興味深かったので、勉強をするインセンティブとなった。
- 卒業後の進路を決めていたので、子どもに関する知識を深める為にテーマ（奇形児、少子化ｅｔｃ）を決めていた。**卒業後、専門学校で学んでいくうちに、同じようなテーマがあると、授業内容も理解しやすく、興味をもって学ぶことができた。**

・私の場合、文章を読む・書く事が好きだったので、内容云々よりも、レポートや論文を制作するという作業自体が大変に興味深く、卒業後は文学部へと進学致しました。
・高校３年生の頃に、総合人間科で日本人の英語習得法について研究し、小論文を書きました。これによって英語学に興味をもち、卒業後の進路先として金城学院大学文学部英文学科を選びました。
・**『総合人間科を通して大学の先生と知り合いになれた。』**奥山先生（名大・農）、小川先生（名大・理）、大森先生（琉球大・理）との出会いによって、環境問題解決手法および生態系のシステムについて、大学での研究に興味をもった。
『議論を深くでき、多方面からの見方を習得できた。』世間一般に思われていることが、実際のところ違っていて、環境問題を解決する本当の解決策とは何か考えることができた。
『進路を選ぶ際に周りをいろいろ考えるようになった。』真の生体材料のリサイクルを目指している研究をしたいと思い、**大学をいろいろ探した。納得できる進路を選択できた。**

（2001年度卒業生）
・**進路について深く考える**よい機会であった。
・総合人間科で興味あることを調べたことで、より具体的なイメージの中から選択することができたように思う。
・だいたい進路は決めていたけれど、総合人間科のフィールドワークで話を聞いたりすることで確定した。
・高校３年生のフィールドワークで、自分が興味をもっていた大学に行き、詳しい話を聞くことができたため。
・**自分の好きなこと、やりたいことを早い段階で体験する**ことで、これから自分でその職業を楽しくしていけるかを考えられる。
・授業の中で（特に高校３年生のとき）**社会で働く人たちと話す機会が得られたことが、これから何をしていきたいかを考えるときに役立った。**しかし直接、進路決定にかかわったとは言い切れない。また、私の場合、**大学受験に小論文を書くことが必要だったので、それにも総合人間科で学んだ知識を役立てることができた。**
・僕は消防について調べていたので、仕事の内容や採用試験のことを調べることができたので。あと、採用試験での面接の際に”総合人間科で消防を調べていた”と言える事が強みだったかなぁと思います。
・私の場合、卒業後は英語科への進学を希望しており、高３時の総合人間科のテーマも自然と英語に関係するものになりました。学校の授業では文法や受験に必要な知識は扱ってくれますが、英語の特徴や他言語との比較などはしませんでした。しかし、総合人間科で自分なりに英語を仏語と比較してみたり･･･、と**興味が以前よりわくようになりました。**その後、短大でも仏語を専攻したりと、総合人間科のおかげかな？と思うときがあります。
・当時は、私が大学を選べるほどの学力もなく、自分の将来の夢について明確なものをもっていなかったので、とりあえずいい大学、レベルの高い大学へという思いが強かったです。しかし、**大学を選ぶ理由として、今まで６年間行ってきた総合人間科で環境やエネルギーについて関心を持っており、それに関する勉強をしたいという思いが芽生えた**ことに役立ったと思います。
・高校１年生と高校３年生の時に、関心のある分野について調べてみたことで、勉強してみたいことをイメージすることができました。本当に実現できるのかは、その時点ではわかりませんでしたが、**将来について考えるきっかけ**にもなったと思います。
・総合人間科の”フィールドワーク”で、いろいろな人の話を聞くことができたので、**進路について、真剣に考える時間**ができました。**受験勉強する時間も大切でしたが、僕にとっては、とても大切な時間になりました。**
・自分の好きなことを学びたいと思っていました。おもしろくなってきた国語（特に古典）か、中１から続けてきた大好きな演劇かですごく悩みました。他の人の意見をきいたり、どんなことを考えているのか、普段話さない人からも聞くことで、とても参考になりました。**ただなんとなくで選択した進路ではなく、じっくり考えることができました。**
・総合人間科で作曲家の生涯を調べることによって背景が見えてきて、曲の楽しさを学び、音楽大学へ進んで勉強したいと思えた。また、一般推薦の面接で、研究した作曲家について質問されたので、きちんと答えることができた。
・総合人間科の時間は、私にとって**自分自身と向き合うことができる大切な時間**でした。特に高校３年生の頃、大学受験で進路をじっくり考える余裕がない中で、総合人間科の外部講師との交流会は私にとって進路を決める決め手となりました。それは、自分の興味のある仕事をされている方の話が、私の進路を確立するのに役立ったからです。
・高校半ばの時期は、明確に進路が決まっていなかったが、とりあえず受けるセンター試験に向けての受験勉強で忙しくなり、家でも将来についてじっくり考える時間がなかなか作れずにいたが、総合人間科を通してそういう時間を確保する事ができた。また、**高３の**

フィールドワークでは、その後の人生を変える出会い（愛知県立芸大の教授）があり、その人のお陰で不明瞭だった私の進路が明確になった。今こうして大学で音楽を学びながら教師への道を歩んでいるのも、総人のおかげだろうと思っている。

・進路そのものにはあまり関係がなかったのですが、入試方法を決めることに役立ちました。今通っている大学は第１志望だったのですが、初めは一般入試を受けるつもりでした。しかし、親に勧められ、推薦入試を受けようかと思ったとき（名古屋から１人で飛行機に乗り、北海道帯広市に行き、面接などを受けなければいけませんでした)、以前の私ならきっと尻込みしてしまったでしょうが、思い切って受けようと決めました。とても不安でしたが、無事受かり、あのとき決心していて本当によかったと改めて思いました。

・中学生のころから、海外に興味をもっていて、中学１年生のときに、とても有意義なフィールドワークをしたにもかかわらず、そちらの進路にすすまなかったということは、自分には向いていないことを総合人間科で知ることができたのかもしれません。

・総合人間科で発表したりしていたので、大学の推薦入試の面接で、自分の思っていることを伝えることができた。

・**物事を多角的に捉える**ことができるようになったと思います。その結果、**自分の意見を持つ**ことができるようになりました。

・社会に出てから、人との接し方（インタビューなどの経験)。社会に出てから相手の気持ちの考え方(２年生時のグループ研究での経験)。

(問)　前記のⅢで①または②を答えた方へ、どのように生きていますか。

(2000年度卒業生)

・高校時代に自分が興味をもっていた事柄を学んだことで『保育士になりたい』という夢が実現されたと思う。また、高３時に総合人間科の授業で、保育士をしていた卒業生の話を聞く機会があり、その時の一言が心に残り、専門学生時代も、就職してからも頑張れている。

・大学生まではレポートの書き方や、文献を調べて論文を書くといった場面で総合人間科は大変生きていました。ですが就職活動の際に、総合人間科を思い出して就職先を決めたかと言えば、そのようなことはありませんでした。例えば出版業界をとっても、興味はありましたが出版業や書店が大変不況で先行きが不安ということもあり、就職先の候補から早々と外れました。現在会社に入っても、『自分の興味のあることを飽くなき探究心で以ってとことん追求する』という研究者的な場面にはほとんど出会いませんので、今では他の数学や古典と同じように、私の中で高校時代の一教科となっています。

・人との話し方や自身でテーマを決める授業などに役立っています。

・１つのテーマで、視点をもって、本などで情報を得て、それらを自分の言葉・表現に置き換える作業。

・総合人間科で何度か小論文を書いたことによって、**作文を書く力**がつきました。また、自分自身やあらゆる物事において、**探求する力**も身に付きました。これらの力は、大学でレポートや論文を書く際に発揮できたと思います。また、様々な状況において、**あらゆる観点から物事をとらえ、判断する力**も身に付いたように感じます。

・高２の時に頑張って戦争と向き合ったことが、現在あいち女性９条を守る会の事務局員になるきっかけだと思うから。教員になるべきかな、と考えるのもやはり高３のフィールドワークのおかげだと思っているから。

・自分の研究のポリシーになっている。それに自分のやりたいことをじっくり考え取り組んだ経験がものをみるときにとても役立っており、**納得するまで考える癖**がついたと思う。大学の先生方を見ていて、社会に何か返せる研究をして、社会にプラスを一つでも多く残したいと思うようになった。

・些細なことでも**疑問を持ったり、自分自身で考えてみる**ことが増えた。

・**問題を発見してそれに取り組む**ということを、中高の６年間使って訓練できた為、大学４年の現在、ある程度楽にできている。

・進路に対するモチベーションが高まりました。

・興味のあることに対してフィールドワークをしたり、自分で文献を調べてまとめたり、今の**大学の研究やレポートにも通じる部分**があり、よかったと思います。高校では自主的にこうして学ぶ機会もあまりないので、そういった力をつける意味でもよかったと思います。

・**知りたいことを調べる、自らの考えを表現する**ということの基礎を学ぶことができた。当時、何気なく選んだテーマが現在（卒業論文）にも繋がっている。大学訪問の際、お会いした院生の方の論文を現在目にしたりということがあり、**研究に向き合う下準備**のようなものができていたように思う。

・**自分でテーマを決めて調べ学習などを通じて答えを見つけようとする姿勢、様々な意見を知り自分の考えを持つこと、情報を取捨選択しまとめる**力など、総合人間科をによって身に付けたであろう能力が、学部生活においてはもちろん、現在も役立っていると思われる。

・現在、直接生きているかどうかわからないが、大学時

の卒業論文では、高３の時に総合人間科でやったテーマと同じようなテーマで研究を行った。

（2001年度卒業生）

・初対面の人とでも自分が興味のあることを話すことができたり、議論ができるようになった。
・**プレゼンテーション**をする力、人前で話すことに抵抗をあまり感じない。自分から行動することで、どんなこともできるという自信につながっている気がする。
・レポート等の作成に際して、書き方、段取りなど。卒業論文の作成に際して、調査の行い方や外部に調査に行くときの手順、作法など。問題意識を持つということ。
・初対面の方と接するときの対応に少し生きているかなぁと思います。あとは、**自分から進んで何かをしようとする**ことです。わからないことを調べたりだとか。
・社会での人間関係（会社の組織等）構築や、調査等の能力向上に役立った。
・就職活動の時に、先方とアポを取って会うことが、総合人間科で自分で電話したりしていたので苦痛ではなかった。人前で話したりプレゼンしたり、インタビューすることに慣れていた。卒論の情報収集の仕方に少し似ている。
・中学から自分でテーマを見つけ、アポを取り、実際にインタビューなどをして、まとめ、発表ということをたくさんしてきて慣れているので、**仕事で企画などを頼まれたり、レポートを出すときも、他の人より早くできるし、自分でそれをあまり苦にせずこなせます。**在学中はそれをあまり意識することはなかったのですが、卒業し、社会に出た今、総合人間科の一連の作業（アポ取り・まとめなど）がとても役立っていることに気づかされました。（総合人間科だけでなく、行事ごとに出される作文の宿題も役立っているのかも…。）
・レポートや論文を書くときに、総合人間科で調べたり、フィールドワークをしたり、集録にまとめたりした経験が役立っていると思います。
・私は今、環境に配慮したエネルギー生産や新しいエネルギーの製造法を開発する研究を行っています。この研究に携わることになったきっかけといいますのも大きく関わりを持っていますのが、総合人間科です。私が、この大学４年生になるまでに経験してきたことや学んできたことをどのように社会に還元していけばよいのかという面で、総合人間科で学んできたことは、よいきっかけとなりました。**自分自身が何をしなければいけないのか？と考えられるようになった**のも、総合人間科が出発点であると思います。
・やはり、中学３年生と高校２年生での「命」についての学習が大きいと思います。授業中やフィールドワーク先で詳しく調べた内容は記憶から薄れていくものも多いように思われますが、「命」の大切さ、重さは私の心の中に今でも強く響いています。
・真剣に社会について考える姿勢ができました。
・大学の授業で発表する時に、総合人間科での経験があるのでそんなに困らない。私は選択で多く総合人間科を履修していたので、その授業で学んだことが自分の基本的な考え方に深くかかわっていると思う。
・自らすすんで勉強しようとする力や調べたことを文章にまとめる力がついたのではないかと、課題レポートなどを書くときに思います。また、興味をもったことについて納得するまで調べるようになったので、**新しいことに挑戦する機会**が増えたとも思います。
・**物事への考え方や、行動が総合人間科を受けたことによって”豊か”になった**気がしました。また、大学での講義で、レポートを書いたり、プレゼンテーションをする機会が多かったのですが、抵抗なくこれらを行うことができました。総合人間科で、研究収録や研究協議会などで発表してきたから、だと思っています。
・試験の準備をしたり、レポートを書くときに調べる方法を身につけていたので、欲しい情報を探し出す力がついた。**いろいろな角度から考えられるようになった**。また、アルバイトを始めるときに、採用担当者にアポを取ることがスムーズにできた。
・研究内容の調べ方など、大学で役に立ち、どのように研究発表をわかりやすくするかなどの工夫も学芸員実習や教育実習などで役に立った。
・総合人間科では、フィールドワーク、つまり人との接し方を覚えれたことが一番大きかったと思います。**アポのとり方、質問の仕方や、初めて会う人との話し方**など、現在の生活に役立つことを多く学びました。
・まず、形式的なものでいうと、人前で話すということや文章を書くということに対して、総合人間科で養われた力が生かされているように思います。また、内面的な面では、今まで総合人間科で出会った**人から学んだことが自分の人生を大きく動かす原動力**として生かされています。
・今でも印象に残っているのは、高３で訪問したミニシアターで働く女性のお話と、そこで観た映画です。好きなことを仕事にしている方の話を聞けたこと、その方が在日朝鮮人であることでの私との境遇や考え方の違いに触れられたこと、とてもおもしろい映画だったこと。具体的に何に繋がったとはいえないが、**中高生の頃にフィールドワークで学校外の人と接することができたのがよかった**と思います。
・レポートなどを書くとき，何かを調べたりするときに総合人間科で行った経験が役に立ちました。
・**自ら学習することの楽しさを知れた**。また、**探求心を**

持つことの大切さを学んだ。そして、**物事を深く考え、自分の意見をしっかり持てるようになった。**大学で総合学習の授業があるのだが、名大附で経験を積んだお陰で、先生から良い評価をもらえることできた。自分が教職につき総合学習の授業をする時にも名大附での総人の授業での経験は大いに役に立つだろうと思っている。また、総合学習に反対する声をよく耳にするが、私は総合学習の時間のプラス面をアピールしていきたい。

・私はもともと知らないところへ１人で入っていったり、電話をしたり、人と話すことや多くの人の前で話すことがものすごく苦手でした。総合人間科でやらなければいけなかったことのほとんどすべてです。しかし、それでも勇気を出してやってきたという経験が（実際に得た知識よりも）今の自分の中に確実に生きています。大学では苦手なことややりたくないことをやらなければならない機会がたくさんありました。そのたびに、高校の時の経験を思い出して、乗り越えてきました。今でも苦手なことに変わりはありませんが、**自分で自分を（苦手だという気持ちを）ごまかすこと（ハッタリ）や、そのときの心の余裕**はこの高校時代の総合人間科のおかげであると思っています。

・自分は何が得意で楽しく感じられるかを知っていることで、深く今後を考えることに役立った。また、**自分で行動を起こすことが簡単にできるようになった。**

・社会人ならではの意見ではあると思うが、総合人間科でのアポ取りの電話やまとめの文章の推敲は、職場での電話や上司への報告文書作成という点で、とても役立っている。**一般の教科とちがって、個人のテーマに基づいて自分なりの考えや意見を、見る人、読む人に伝えるということは、他校の出身者からはとても特殊であると思われるが、私は教科の授業と並んで必要となる授業であると思うし、私自身、やってよかったと思っている。**

・**自主的に行動する力**が他校出身者よりもあることを、大学入学直後、強く感じました。また、興味があれば、すぐ調べたり、フィールドワークに行ったりという気になりますし、アポイントメントをとって初対面の人に会うことが苦手ではないです。

・現在、大学４年生で卒業論文を書いているのですが、資料を集めることからまとめるところまで、総合人間科と似ていてあまり苦なくできています。

・卒論で資料の検索方法や、他大学の先生に手紙を書いたり、電話をしたり、‥‥初めてのことではないので、かなり積極的に取り組むことができる。発表資料なども書き方で困ることがなかった。人前で話すことに緊張がなくなった。

・人に言われるのではなく、自分は何をしたいのか、何が必要なのか、何をしなければいけないのかを自分で考え、実行する力を培ったこと。大学では何も考えず、言われたことしかできない者や、将来設計もせず、ただ遊び呆ける者、一人では何もできない者などが多数いる中、**自分が信念をもって夢のために行動できるのは、総合人間科で培った「考える」のおかげ**かもしれない。また、アポを断られたときにどうするかとかなどの適応力、**相手を納得させるための論理力**なども培われた。

（問） 前記のⅡで③または④を選び、Ⅲで①または②を選んだ方へ、総合人間科に対する考え方の変化はどんな理由によるものですか。

（2000年度卒業生）

・総合人間科の授業では毎年レポートを作成するので、その経験が大学に入ってからのレポート作成や卒業論文の作成等に生かせるという話は在校中から小耳に挟んでおりましたが、実際大学を卒業してみて感じたことは、本当にそうだったのかという疑問です。というのも、総合人間科のレポートでは結構な枚数を毎年書いたと思うのですが、今にして思えば、**子どもの書く幼稚なものに過ぎなかったという実感**があります。
実際、大学で課される2000字程度のレポートにも辟易していましたし（総合人間科の経験があるにもかかわらず）、卒業論文の作成に影響を与えたのも、総合人間科の経験ではなくて大学で課されるレポートの作成技術の方が大きかったです。
Ⅱで“まあまあ生きている”と回答したのは、企業や個人に電話や手紙で調査の依頼を何回も行った経験に関してです。赤の他人に依頼の電話をかけたり手紙を書いた経験は、他者とアポイントを取る機会が増えた現在に役に立っているかと思います。

・大学への進路を決めたときの理由などには、自分の考えで選びましたが、大学に入ってからの生活や授業などで、総合人間科で行ったテーマ決めや行動力が役に立っていると実感しています。

・総合人間科がどうこうというより、自分の取り組み方に問題があった。あまり真剣ではなかったと思う。それから学んだことを忘れていた。

・高校の時はただ漠然と総合人間科をやってるだけだった気がする。**卒業して何年か経ったときに、自分で疑問点を見つけ、それについて考えたりすることの大切さを改めて知ったときに、総合人間科の良さを再認識しました。**

（2001年度卒業生）

・総合人間科での選択コースと実際の自分の進路の文・理が違ってしまったため、進路の選択に際しては総合人間科は影響しなかった。

・考え方の変化はない。ただ大学入試は課外の活動よりも学科試験が重視されているので、高校卒業後の進路は主に自分の学科能力に見合う進路（大学）を選んだ。しかし、大学に入ってからは思考力が求められ、特に社会学部に所属しているので、**今思えば、思春期に主要科目以外を学べる時間があったことは生きている**と思ったので。
・進路選択では高校３年生の総合人間科の授業を受けていないし、現在の学部も総合人間科があってからこそ選んだものではないので、Ⅲの質問では③と答えました。しかし、総合人間科の授業は現在も生きるうえで役に立っていると思います。
・学生のときは、その時々に興味があることを調べていたので、進路にはあまり関わりはありませんでした。でも、**社会人になって、総合人間科の授業を受けたことにより、今まで学んだことや、それ以外のことにも興味をもつようになりました。**
・現役のときは正直、こんなことやるより数学とか英語をやったほうがいいと思っていたが、浪人、大学に入って大切なのは学習ではなく学問だと思ったから。また、法律を勉強していて、知識を得るための学習は必要だが、大事なのはこの知識を使っていかに相手を納得させるかという論理力。決して参考書などに書かれているマニュアルだけでは人は救えないと気づいたから。

10. 考　察

本校の11年にわたる総合人間科の取り組みとキャリア形成との関連について、実際に授業を受けた生徒や卒業生の意見を中心にみてきた。本校は１学年３クラス（中学では２クラス）という小規模校であり、学校あるいは学年全体で動きやすい。中高一貫校であるため、異年齢の交流が校内で行いやすい。名古屋大学の中という恵まれた立地条件にあり、大学の研究室への訪問がしやすい。以上のようなメリットを生かした総合人間科により、自発的に、探求心を持って学び、自分の意見を持つことを可能にした生徒が多く生まれた。また、高校卒業後になって総合人間科での学びのありがたさに気づくこが多いこともわかった。

ただ、総合人間科では「自分の好きなこと」が個人テーマにされることが多いが、これが進路決定において必ずしもプラスになるとは限らないとも考えられる。自分の好きなことを自分だけのためという狭い視野からその生徒の進路とさせては、正しい自己決定とはいえず、他者のため、社会の中の自分という視点を獲得させることで、より望ましい進路決定になるのではないかということである。さらに、「出口指導」たる進路指導で生徒に現実をしっかり見つめさせ、十分な自己責任を要求することで、現実を見つめることのできない「フリーター」や「ニート」を養成することを防止する手だてになるのではないかとも考えられる。

生徒は総合人間科で学んだことに興味をもち、キャリア意識を高め、教科の学習に意欲的に取り組めるように自ずからなっていくものとばかりせず、教師の側にも生徒に現実を見つめさせ、社会の中で考えさせ、責任を持って自己決定ができるような意識を持たせることが求められていると考えられる。